◆先輩からのアドバイス◆

論文・レポート作成のワンポイントアドバイス

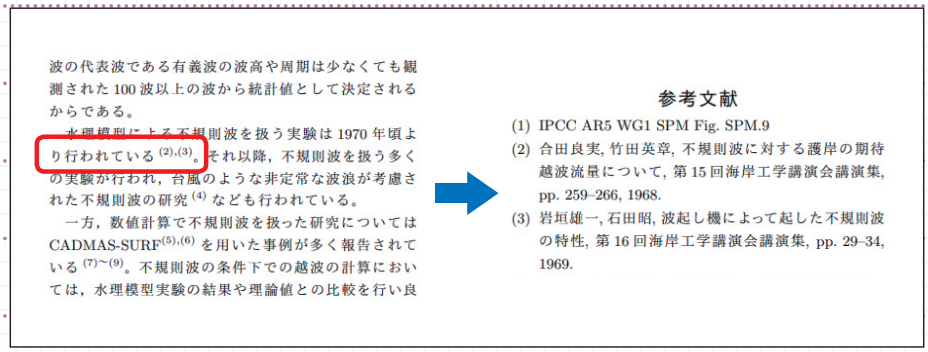
みなさんが学校生活を送るうえで、避けては通れないことである論文やレポートを書くにあたって、必要になってくるものが参考文献です。参考文献は自分の考えに説得力や信用性を持たせたり、その情報がどこから来ているのか読み手にも分かりやすくするため、正式な文章や、考えを述べる場においては必須のものになります。

そんな参考文献ですが書き方にもルールがあります。ここでは基本的なルールや詳しいルールは説明を省かせていただきますが、忘れてしまいがちな、しかし重要なポイントを説明したいと思います。

それは参考文献を用いた場所に分かりやすく、どの参考文献を用いたのか“印”をつけることです。これは個人的な意見ではあるのですが、普段書いているときに見落としてしまいがちなポイントなのではないでしょうか。

ぜひとも参考文献を書くときに忘れないよう気を付けて書いてみてください。

（理工学研究科　M1）


波の代表波である有義波の波高や周期は少なくても観測された 100 波以上の波から統計値として決定されるからである。

水理模型による不規則波を扱う実験は 1970 年頃より行われている [2],[3]。それ以降，不規則波を扱う多くの実験が行われ，台風のような非定常な波浪が考慮された不規則波の研究 [4] なども行われている。

一方，数値計算で不規則波を扱った研究については CADMAS-SURF[5],[6] を用いた事例が多く報告されている [7]〜[9]。不規則波の条件下での越波の計算においては，水理模型実験の結果や理論値との比較を行い良

参考文献

(1) IPCC AR5 WG1 SPM Fig. SPM.9
(2) 合田良実, 竹田英章, 不規則波に対する護岸の期待越波流量について, 第 15 回海岸工学講演会講演集, pp. 259–266, 1968.
(3) 岩垣雄一, 石田昭, 波起し機によって起した不規則波の特性, 第 16 回海岸工学講演会講演集, pp. 29–34, 1969.

参考文献がどこに使われているのか分かりやすい例